

官能評価に活かす

(株)メディア・アイ感性評価研究所 所長
市原 茂 (いちはら しげる)

私は、現在、(株)メディア・アイ感性評価研究所に勤務しております。私がこの職に就いたのは、平成25年3月に前職である首都大学東京を定年退職してからです。すでに3年が経過しました。メディア・アイの本業は、コンピュータのシステム開発やコンサルティングですが、業務内容を広げ、当研究所が設立されました。

現在の研究所で行っている私の仕事の内容は、依頼企業への官能評価の指導や、官能評価の装置やソフトの開発です。官能評価は、感覚を用いて製品の評価を行い、それをものづくりに活かすための学問ですので、自動車や食品を扱っている企業、さらには、食物の研究をしている大学の研究室などが、当研究所のお相手ということになります。

人間の感覚を問題にするという点で、心理学と官能評価には測定手法など、共通点がかなりみられます。実際、官能評価の歴史を振り返っても、官能評価は、心理学に負うところが多い学問といえます。一方、実験参加者に関して、両者には大きな違いがあります。官能評価の場合には、心理学と同様に一般の人を対象にする実験も行いますが、その他に、一定の基準で製品の評価をすることができる熟練者を用いて、製品に対する感覚強度を測定することも行います。これは、分析型官能評価とい

われますが、実際、食品に対する味覚や嗅覚の評価を確実に行うには、ある程度、訓練を受けた感度の鋭い人が必要ですので、官能評価には、分析型官能評価が欠かせないこととなります。

心理学と官能評価は、測定手法が共通していると述べましたが、官能評価に独自の手法もあります。以下のTDS (Temporal Dominance of Sensation) などは、その好例といえます。

上の写真は、私が当研究所で開発した装置とアプリを使って、TDSの実験をしているところを写したものです。TDSというのは、味覚や嗅覚などの強度の時間的な変化を測定する手法で、例えば、ある食品を口にした時、様々な味覚が生じることがありますが、TDSでは、これらの複数の味覚の時系列的変化を同時に測定します。TDSは、2010年ころから、海外の研究者たちによって使われ始め、最近では、日本でも行われるようになりました。私自身も、このアプリを使って食感の時間的な変化を探る研究を食物の研究者と一緒にはじめたところです。また、当研究所では、SD法や順位法

Profile—市原 茂

1980年、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程心理学専攻単位取得満期退学。文学博士。中京大学、東京都立大学、首都大学東京で助教授、教授を歴任。専門は実験心理学、官能評価。



研究所で、開発したTDSの装置を用いて、アプリのテストをしているところです。

などの心理学でよく用いられる手法についてもアプリを準備中です。

実験心理学を専門に学んだ学生にとって、自分の学んだ専門が活かせる職場は非常に限られていますが、私の卒業生の中には食品に関連した会社の官能評価部門に就職し、自分の専門を活かしている人もいます。企業の官能評価の部門は、心理学ではなく、食品科学を専門にしてきた学生を採用しているところもありますので、それはそれで狭き門なのですが、企業の担当者の中には、実験心理学出身者の能力を高く評価している人もおりますので、あきらめずにチャレンジすることが大事だと思います。企業の官能評価部門は、実験心理学の知識を活かすことのできる職場といえます。